

ほ ど 教育センター通信

火床の火の心を紡ぐ

第7号（通算57号）
平成30年11月22日
三条市小中一貫教育推進課
教育センター 発行



さかえ学園
いじめ見逃しゼロスクール集会
11月2日(金)

「不登校支援を考える会」を終えて

小中一貫教育推進課 指導主事 小田 貴樹

11月8日（木）に市教委主催の「不登校支援を考える会」を行いました。心と学びの相談・支援センターから事例発表とグループワークの進行等に御協力いただきました。平日の午後開催ということで計画段階では20名ほどの参加を見込んでいたのですが、予想を上回る参加申込みがありました。保護者、教職員、関係者を含め全体で33名の出席であり、ニーズが高いことを実感しました。

不登校や登校渋り等で悩んでいる保護者から、現在の状況についてお話しいただき、悩みを共有したり、今後の支援についてグループごとに話し合ったりしました。「学校との相談のみで、他の関係機関等に相談をしていない。」「どこに相談したらよいのか分からない。」「不登校になったきっかけや要因が分からない。」等、日頃抱えている悩みを共有する会となりました。これをきっかけに支援の輪を広げていくことが、この会の目的でもあります。保護者は、話を聴いてくれる人に、「また話を聴いてもらいたい。」、いざという時に「頼りになってほしい。」と思っています。学校と連携を密にして関係機関との関わりを積極的に進めていくことの大切さを再確認しました。

不登校支援の目標は、将来の社会的な自立に向けての支援です。不登校状態が継続すれば、時間の経過とともに不登校の要因は変化し、学習の遅れや生活習慣の乱れなどが加わることで解消がより困難になり、学校復帰が難しくなります。不適応児童生徒への初期対応を迅速に行い、関係機関と連携した支援を行うことや、校内委員会等で定期的な改善に向けた協議を行い、新たな不登校を出さない「未然防止」の取組、保護者や児童生徒に寄り添った対応をお願いします。

学園の取組紹介

しただの郷学園

11月15日（木）しただの郷学園第2回一斉研修会が行われました。

「下田を愛し、互いに高め合い、やり抜く子」を目指し、しただの郷学園の職員が集まりました。

学習指導部と教育課程部から進捗状況と反省・今後の活動予定の確認の後、教科等分科会に分かれ各教科の実践と課題について情報交換が行われました。

「しただの郷学園働き方改革」提言やコミュニティ・スクールのスタートに向け、しただの郷学園小中一貫教育推進協議会「教育研究会」の組織や活動内容もよりよい形に改善していきます。下田の子どもたちのためにこれからも先生方の活躍が期待されます。



第2回一斉研修会 11/15

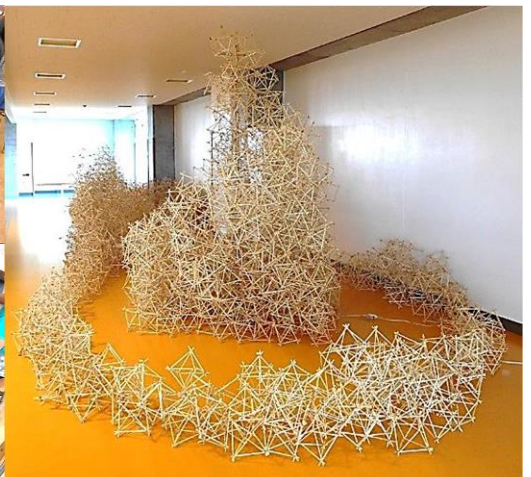
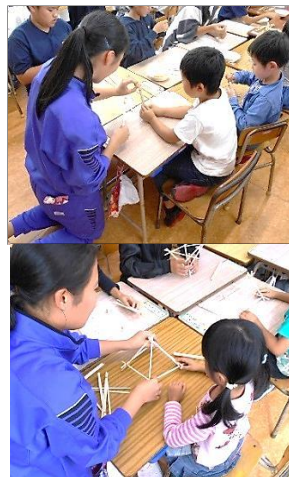
大崎学園

大崎学園では義務教育学校としての新たな教育活動が展開されています。その中で、「あこがれ意識」や「自己有用感」を醸成する活動が行われています。

大崎アート

前期の児童が後期の生徒から教えてもらいながら、割りばしを使って正8面体をつくりました。それを組み合わせて、一つのアート作品を完成させました。

後期の生徒たちは、前期の児童に優しく、わかりやすく作り方を教えていました。こうした活動が生徒の「自己有用感」を高めることにつながっています。



合唱コンクール

文化祭当日の午後から、5年生以上の児童生徒、地域・保護者の方が参加し、7年生以上の生徒による合唱コンクールが行われました。

どの学級の歌声もすばらしく、5・6年生の児童にとって「あこがれ意識」を高める活動となりました。



文化祭 10/27

今年も第三中学校で、竹箸教室が行われました。裏館小・上林小4年生の児童が、第三中1年生の生徒と一緒に小刀の使い方、握り方、削り方を学び、竹箸づくりに挑戦しました。

市から派遣された24名の講師の皆さんの熱のこもった御指導のおかげで、初めて小刀を使う小学生の児童の手つきが、急速に様になっていきました。中1の生徒は小4の時の経験を思い出しながら、優しく小学生に声をかけて、それぞれのオリジナル竹箸を作り上げていました。刃物の町として発展を遂げてきた三条市で生活していることを実感できた一日でした。



「三条学講座」受講、ありがとうございました

11月3日(土)の「包丁づくり実技講座」をもちまして今年度の三条学講座が修了しました。寄せていただきました感想から、それぞれの講座で特色ある“三条のひと・もの・こと”に直接触れることで得られる感動は格別だったことが伝わってきました。そこで感じ・学ばれたことの一部を今後の児童生徒の皆さんへの指導・自身のライフワーク等に生かしていただければ幸いです。今年度は、特に第2回講座で、「今年は参加できなくて残念です。」「他に参加できる日があるといいのですが…」との声を何件いただきました。講座への関心を寄せていただくことに感謝しますとともに、今少し柔軟な期日の設定を考えていきたいと思っております。

10月2日(火)に三条鍛冶道場で、将来この三条の地で鍛冶職人を志す方(1名)の「研修生受入式」がありました。その日ちょうど「和釘づくり学習」の取材がありましたので、少し覗かせていただきました。三条市で女性の方が研修生として登録されたのは、初めてのことだそうです。鍛冶職人の裾野の広がり一夢の創造と実現への示唆をいただく貴重な出会いでした。

H30年度「三条学講座」受講者数(人) ()内はH29年度 ※義教：義務教育学校

回	講座名(略称)	小学校	中学校	義教*	合計
1	郷土の偉人 諸橋轍次博士	12(5)	3(2)	1	16(7)
2	包丁研ぎ講座	24(37)	8(19)	2	34(56)
3	和釘づくり講座	10(20)	4(2)	2	16(22)
4	三条鍛冶の歴史(ルーツ)	5(3)	2(5)	1	8(8)
5	三条刃物について	11(10)	2(2)	1	14(12)
6	秋の大崎山をたずねて	7(6)	4(2)	0	11(8)
7	包丁づくり実技講座	9(8)	7(3)	0	16(11)
合計		78(89)	30(35)	7	115(124)

「道徳授業の質的転換 ～価値を教える → 一人一人の価値観を育む授業へ～」

小中一貫教育推進課 教育センター 捧 信之

学習指導要領解説「特別の教科 道徳編」には次の文言があります

道徳科の授業では、特定の価値観を児童生徒に押し付けたり、主体性をもたずに言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育の目指す方向の対極にあるものと言わなければならない。

「道徳科」が、今年度は小学校で、来年度は中学校で全面実施となります。今回の改訂で最も「肝」となるのが上記の考え方だと、私は思います。道徳科では「価値を押し付ける」のではなく「一人一人の価値観を育む」ことこそ大切です。

先日、嵐南小藤井学級4年生道徳科の授業を拝見させていただきました。主題は「家族で協力し合って」、教材は「ブラッドレーの請求書(教育出版)」、話の概略は以下のとおりです。

ある朝、ブラッドレーは朝食のテーブルのお母さんの皿の横に1枚の紙を置く。その紙には「お母さんへのせい求書 おつかいちん1ドル おそうじ代1ドル 音楽のけい古にいったごほうび1ドル おるす番代1ドル 合計4ドル」と書いてあった。それを見たお母さんはにっこり笑って何も言わない。昼食時、お母さんはブラッドレーのお皿の横に4ドルを置く。お金を見たブラッドレーは大喜び。けれど、お金と一緒に小さな紙が置いてあり、そこに書かれていたものは「ブラッドレーへのせい求書 親切にしてあげた代0ドル 病気をしたときのかん病代0ドル 服や、くつや、おもちゃ代0ドル 食事代と部屋代0ドル 合計0ドル」これを読んだブラッドレーの目は涙でいっぱいになる。お母さんのところへ走り言う。「お母さん、ごめんなさい。このお金は返します。これからは、せい求書なしで、お母さんのためになんでも手伝います。」

本時の学習問題◎は「お母さんの請求書はなぜ0ドルなのか？」です。子どもたちは、4人グループで◎について話し合います。

Hさん：0ドルならせいきゅう書なくてもいいんじゃない。あなたのためにここまでしてるよってことかな。ブラッドレーはお母さんのしていること気付いてないじゃん。
Aさん：なるほど、ブラッドレーが自分で気付いてほしかったというか、あなたのためにつくしてるんだよって。お母さんはブラッドレーのことを大切に思ってるってことを。
Sさん：気付いてないから、言葉に言えないから自分で気付いてほしかった。
Aさん、Hさん：そうだね いいねえ いいねえ。
Aさん：もしかしたらお母さん傷ついたらんじゃないかなあ。大切に思っていることを言葉ではちょっと言いにくいから、それでせいきゅう書に書いたんじゃないかな…



Aさんは、話し合いながら仲間の考えを受け、自分の考えを多面的に深めていきます。いい姿です。授業の終末、振り返りにAさんは次のように記述しました。

ブラッドレーはなぜお母さんの請求書を見て泣いたんだろう？お母さんはどうして請求書を「0ドル」としたんだろう？と悩みました。けれど、班のみんなと考えたり、クラスの友達と話し合ったりして、だからブラッドレーは請求書を見て泣いたのか！や、そういう考え方もあるんだ…と、びっくりしたりなっとくしたりしました。これからは家族のためや友達のためにもっと手伝いができるようにしたいです。

道徳科で目指す授業の姿は、「道徳科の目標」に明確に示されています。

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己(人間)の生き方についての考えを深める学習 ()は中学校

Aさんは、教材を通して家族についての思いを見つめ、友達と話し合いながら考えを多面的・多角的にし、そして「これからは家族のために…」と、自己の生き方について考えを深めていきました。Aさんだけでなく、授業を通して子どもたち一人一人が自分らしい「価値観」を育んでいきました。このような姿が生まれるためには、次のような点が大切です。

- 「問題意識」があること。「ブラッドレーはお金を請求したのに、なぜお母さんは0ドルなのか？」Aさんは悩みます。「問題意識こそ、主体的な学びの原動力」となります。
- グループや学級全体での話し合い(聴き合い)。Aさんは友達の話をよく聴いて考えを多面的・多角的にしていきます。この「よく聴く」ことこそが対話的な学びの質を高めます。
- 振り返り。Aさんは振り返りの中で改めて自分の考えを整理し、自己の生き方を見つめます。この自分を見つめ直し「自己内対話をする」ことが、深い学びへとつながります。

もちろん「主体的・対話的で深い学び」とは、「順序や方法」ではなく「子どもの姿(内面)」です。ですから、常に「同時に起きている学び」だという認識も忘れずにいたいものです。

最後に、このような授業を可能にする最も基盤となるものは何でしょうか。それは、教師と子ども、子どもと子ども同士の信頼ではないでしょうか。

教師と子どもたち同士の温かいまなざしの中で授業は深みを増し、そして、そんな授業を通して、また互いの信頼が深まっていきます。

そのことを、藤井先生と子どもたちから学ばせていただきました。

これからも、道徳科の授業を要とし、すべての教育活動を通じて道徳教育を進めていくことで、各学園・学校で充実した学びが展開されることを期待します。よろしくお祈りします！